

青少年くらしき

家庭版

発行 倉敷市教育委員会  
編集 生涯学習課  
426-3845

11月



# 「水島こども食堂ミソラ」

今回は「水島こども食堂ミソラ」の運営をされている井上正貴さんからお話を伺いました。「水島こども食堂ミソラ」は二〇一七年九月にオープンし、それから三十回以上（コロナ感染症対策のため最近開催できない）こども食堂を開催され、延べ一五〇〇人以上の方に食事を提供されています。

そもそも「水島こども食堂ミソラ」ができたというのは、地域の有志の人々から立ち上げたという声からでした。当時ぼくは学習支援員の仕事をしていたのですが、子どもの実態（例えば、ネグレクトやDVなど）を目の当たりにして思いが募ったのは事実です。それから、岡山で展開しているこども食堂を手本に、開設へ向けて何度も話し合い、協議を重ねました。準備には約一年半もかかりました。初めての食事会（カレーライス）は感慨深いものがありました。



半年かけてやっとこの日を迎えたのです。普通、半年かけて「いただきます」は言いませんから。カレーは女性たちに混じって作りました。ぼくも調理は嫌いではなかったので頑張りました。その時には子どもたちも入って手伝ってくれました。当日は二、三十人の子どもが来てくれ、その後の会は、子どもより大人が多い日もありました。続けていく内に四十人、五十人と増え、ピークは六十九人まで増えました。ただここまで増えると回らなくなり、このままだと一人一人の対応がおぎなひになり、大切にしようとしている「困らん」ができなくなることを懸念しました。そこで予約制にしてはどうかと

いう話もでてきました。食事が終わった後、一部の人は帰りますが、残っている参加者、ボランティア、スタッフが、ここに関わっているみんなが一人三十秒ほどの自己紹介や思いなどを話します。意識して雰囲気を作ることも大切だと考えています。ここに来る子どもや大人は、水島地区に限らず、倉敷地区からも来られます。わざわざここまでやって来る理由は、零団気が気に入っているからだと言つのです。ぼく自身、垣根を作らないことをベースにしていますし、誰が来てくれてもいいと思っています。第三土曜日の昼間には、商店街の公園は子どもたちで大賑わいになり、普段見られない光景を見ることができました。子どもは、食事が終わったらパーッと外へ出て遊びます。それが暑い夏であろうと、寒い冬の日であろうとお構いなしです。これこそ、子どもの本質だと思います。

子どもたちがこども食堂で食事を摂る背景にあるものは、貧困が考えられますが、実は子どもの貧困というのは、親の貧困を意味します。子どもの貧困があること自体が、豊かさを失った社会的な貧困だと思います。ここは地域の食堂なのです。家族のような雰囲気を醸していきたいのです。みんなと食事することによって、和気あいあいの場が生まれます。楽しさや豊かさを共有することは、貧しさや反することだと思えます。ただ単に、月に一度の食事を提供するということだけではなく、何でも本音で話せて、人とのつながりができると豊かさが生まれるのです。この豊かさが社会全体に広がっていったら、もっと幸せな町づくりができるのではないかと思います。



「三つ目のおばけ」 水彩画  
倉敷市立倉敷東小学校1年 宇草 陸（令和2年度）  
ピエロを意識したダイナミックな作品に仕上げました。明るい色を使い、クレパスで塗る際に配色がかぶらないように工夫しました。



現実には、食事もろくに摂れない子ども  
います。その現実を伏せるのではなく、  
何かの形で大人は「豊かさって何なん  
だろう。」と振り返らないといけない  
と思います。食事をきちんと与えられ  
ない親ほど、心の鎧やガードはきつく、  
人に見せたくない、知られたくない思  
いが強いのです。知られるとまずいの  
は、競争社会では弱みを握られ蹴落と  
されるからです。それを経験してきた  
人ほどこの思いは強いのです。ガード  
していかなければ生きていけない社会  
の仕組みは、もう終わらなければなら  
ない時を迎えていると思います。それ  
を上手に縫い合わせていくような仕組  
み、ネットワークとして従来からある  
行政のシステムや制度も必要なのです  
が、横を縫い合わせていくような仕掛  
けをしていくのは市民の役目だと思  
います。ただ、資金が不足します。そ  
うなった時には基金が必要です。ただ、  
これをバックアップするシステムがな  
いとぼくたちも動けず、該当する家族  
を支援できないことと

なり、最後に被害を被  
るのは子どもなのです。  
そうならないためには、  
知られないようにブラ



イバシーを守ってあげ、この人がいれ  
ば何でも話せるような人間関係を築い  
ていくことが大切です。

ぼくは、水島出身で、ここで育ちこ  
こで暮らすしかないのです。この地域を  
良くしようという思いがありました。  
良くするということは、善悪とか正義  
とかというものではなく、良い方向に  
する、良い状態にするということです。  
ぼくは、この町は本当に好きではあり  
ませんでしたが、自分のコンプレックス  
の源だったのです。ここで育った自分  
を肯定できなくなったのは、自分の家  
族や町のせいだと思っていました。し  
かし、そんな思いをそのままにしてい  
ては良くはならないと思い、まずは、  
今の自分を受け入れ、自分を好きにな  
ろうと思いました。自分の人生を否定  
したくなかったし、何とかして自分を  
肯定したかったのです。現状が悪いの  
だったら、良くすることに自分ができ  
ることを一生かけてやっていこうと  
思ったのです。そのぐらい深いところ  
からの思いがないと、ただ人助けがし  
たいというレベルではできないのです。  
よく人から、「地元への恩返しですね。」  
と言われるのですが、ぼくは、「何の  
恩がある?」と思っています。地元が

嫌いで、涙が出るような幼少期を過ご  
した子が、地域のために立ち上がった  
時に、「地元への恩返しですね。」なん  
て言えません。もし、「こんなところ  
なんて。」という子どもがいるなら、  
ぼくは、「よく考えな。」と言います。  
ぼくだから言えるのです。これ以上傷  
つきたくないから、視野にもいっぱい  
フィルターをかけ、無関心でいようと  
か、嘘をついておこうとか、自分で仕  
組みを作っていくのです。ところが、  
心が癒えてきて元気になり、本当の意  
味で大人になった状態で初めて、「やっ  
ぱり恩義があるなあ。」と言えるのは、  
すごいところを一周してやっとわかる  
ことなのです。

誰でも幸せになりたいと思っていま  
す。シンプルに一人の人間として幸せ  
に生きたいのです。ただ、自分を大切  
にすることを教えてくれる場所が見当  
にしないのです。学校の授業には出て  
きません。でも、どこかにヒントはあっ  
たはずなのです。本や講演会、そして  
年上の人、例えば疑似的な家族の父親  
役の人や、母親役の人と交流する中で、  
お手本探しをしていけば気づくことが  
あると思います。ぼくは高校生の時に、  
「こんな生き方をしている人がいるの

か。」「このコミュニティの中にいれば  
愛されている。」ということに気づか  
されました。NPOの活動に行っても、  
若い人はいないので随分重宝がられま  
した。そこでは、人生の先輩にあたる  
人からいろいろなアドバイスを励まし  
をしてもらいました。そうこうしてい  
る中で、こういった人は家族のような  
存在にもなってくれました。いわゆる  
ロールモデルができ上がっていくので  
す。生き方のよき見本がそこにあるの  
です。そこで出会った人々が、自分の  
境遇の中で欠落したパーツを、ここで  
一つ一つ補い、埋めていくことができ  
ました。そして、十年、二十年と経験  
を積むことによって、家庭や、家族の  
姿であったりするものを得ることがで  
きたように思います。

こども食堂の活動では、そういった  
サンプルをベースに「一家団らん、み  
んなでいい雰囲気を作れる場所」を作  
りたいのです。  
(つづく)

